特集2

明日へと続くカントリーロード。

神東美希は、これから何をつづり続けるのか。

1年間の活動期間を満了した緑のふるさと協力隊員・神東美希さん本人に、この1年間の活動内容、住んでみて思ったこと、これからの展望などについて、せきららに語ってもらった2度目の春を迎え、今その胸に去来するものとは…

神東美希（かんとうみき）　愛媛県伊予市出身。緑のふるさと協力隊員第18期生。緑のふるさと協力隊は、特定非営利活動法人地球緑化センターが推進する、若者を地方へ派遣する事業。美希さんは、本町5代目の隊員。

日常という活動の中で培った「意識」

4月11日。コトコトと列車に揺られ、私は本町にやって来ました。「あぁ、今日からここで暮らすんだ」。下泉駅のホームに降り立った時の緊張感とワクワク感を、昨日のことように鮮明に覚えています。あれから11カ月の月日が流れただなんて、信じがたい事実です。

着任して初めての日曜日。わけも分からないまま茶娘姿に着替えさせられ、気がつけばSLに乗ってお茶を配っていました。「川根茶の日イベント」。思えばこれが初めての対外的な活動でした。三十路も過ぎて茶娘のコスプレだなんて…我が人生の行き当たりばったりさに感動すら覚えると同時に、「緑のふるさと協力隊って何でもありなんだ」と悟りました。

見る景色、出会う人々。何もかもが初めてで、右も左も分からないうちに一番茶シーズンが到来。全国品評会のお茶摘みと調整作業、瀬沢共同茶工場の手伝い、農林業センターでは茶園に肥料をまいたり、草をむしったり…。一年間の活動のピークを最初の3カ月で迎え、自分が何をしているのか把握できないまま、時間だけが過ぎてしまいました。これも川根本町に派遣される協力隊の宿命です。

夏には、炎天下での農作業に加え、茶茗舘や音戯の郷での手伝いが始まりました。今だから言えますが、この時期私はくすぶっていました。活動では、決まったメニューをこなすだけでなく「自分らしさ」を取り入れたい。活動以外では、地域に溶け込むために人見知り&出不精な「自分の殻」を打ち破りたい。「自分らしさ」と「自分の殻」の間で、もがいていたのです。

そんなとき「ヒトの魅力@かわねほんちょう」の企画に巡り会います。「地域の人たちに出会い、その魅力を伝える」。私にはうってつけの企画でした。人と出会うたびに心が温かくなり、少しずつこの町を好きになっていきました。夏祭りやお盆を満喫する一方、最初で最後のホームシックにかかったのもこの時期でした。

実りの秋、協力隊の活動も最盛期を迎えます。週末のたびにイベントを手伝ったり、地域行事に参加したり、休日返上でインタビューに回ったり…。忙しすぎて「本町の秋」を堪能する暇もありませんでしたが、気持ちは充実していました。イベントでは、みんなで同じ目的や時間を共有することや、自分を必要としてもらえることに喜びを感じました。インタビューでは相手を知ろうとすると同時に「自分自身を知ってもらう」ことを心がけるようにしました。

着任当初から一貫して、広報紙や回覧板、ブログに率直な意見を書いてきましたが、この頃から地域の人の反響が大きくなってきた気がします。

山間地の冬に不安を抱いていましたが、過ぎてみると思ったほどではなく、安心しました。12月は怒涛の忘年会ラッシュ。毎日飲んでいた記憶しかありません。地域の人とも気負わず接するようになり、ときどき自分が協力隊であることを忘れそうになるほど。特に、主な活動先である農林業センターと茶茗舘は「うちの庭」感覚になり、緊張感が足りなくなっていたかもしれません。反省です…。

一方で「川根女子部」を結成したり、大勢の人の前で意見を述べる機会をもらったりと、任期残りわずかになって活動がますます充実。この時期のブログに「岩にしがみついてでも本町に残りたい」とつづったのを覚えています。

徳山の盆踊りで笛を担当

間伐体験

ゆずの収穫

おじさんキッチンに参加して

光陰矢のごとし。一年間という期間は、本町を「知る」には十分でしたが、本町のために何かを「する」には短すぎました。というわけで、皆さんがこの記事を読んでいる頃には、私は本町のどこかで2度目の春を迎えています。

これからも「カントリーロード」は続きます。今まで皆さんにご愛読いただいた「カントリーロード」は予告編に過ぎず、さしずめこれからが本編といったところ。どんな内容になるかは本人さえ分かりません。

残念ながら「永久就職」でないことだけはお伝えしておきます…。